来迎における正念と魔縁

神居文彰

一

浄土教では、念仏者の臨終に、『無量寿経』巻上の第一九願・『阿弥陀経』等を典拠に、阿弥陀仏による来迎が定義されている。『阿弥陀経』には「聞説阿弥陀仏執持名号若一日…（中略）若七日一心不乱其人臨命終時阿弥陀仏与諸聖衆現在其人終時心不顚倒即得往生阿弥陀仏極楽国土」（浄全一、五四）とあり、来迎の時点での正念を示している。また、法然『逆修説法』では「為臨終正念来迎…（中略）…然則来迎引接為対治魔障也、来迎義存略如斯」（昭法二三四―二三五）と臨終正念のために来迎が顕現され、魔をさえぎることによって正念が実現することが端的に示されている。

これらには、仏の来迎によって魔が取り除かれること、つまり臨終における心的状態としての正念には魔の除去といった過程が必要とされる考えや、仏の来迎の相対概念に魔の来迎を設定する思想、さらに臨終の奇瑞の対局に臨終の悪相があり、それに魔が関わってくる問題等が内在されている。

従来の臨終における魔の研究およびその周辺論稿には、金子大栄『教行信証講読』「〔教行の巻〕―魔について―」、中村薫「華厳経に於ける魔について」（印仏研27―1）、神戸和麿「『教行信証』にあらわれた「魔」の意味（印仏研25―2）」、細川涼一「謡曲『第六天』と解脱房貞慶 ―貞慶の伊勢参宮説話と第六天魔王―」（金沢文庫研究二八七）、成瀬良徳「死をめぐる「正念」の意味」（印仏研32―1）、谷川健一『魔の系譜』（紀伊国屋書店）、等で言及され、さらに魔と鬼、怨霊、妖魅等の異人と同一視した観点に立った、馬場明子『鬼の研究』（三一書房）、小松和彦『悪霊論』（青土社）等がある。魔によって起こる障害、魔の機能の一面を考えるもので、いずれも魔の捉え方、理解と云った点を注視した形で論が進められている。

本稿は、特に日本を中心に、魔の除去の過程の捉え方が、

系統によって変化する事に留意しつつ、来迎を契機とした臨終正念と魔について考察するものである。

二

魔とは周知のように Māra の音写語で、修行の妨げをするものの意から、釈尊の内的葛藤を表す古典的表現であるとともに、煩悩全般をさす場合、竜樹『大智度論』巻五「問曰、何以名レ魔。答曰、奪二慧命一壊二道法功徳善本一。是故名為レ魔。」（正蔵二五、九九上）等に説かれる正しい智慧によって除滅される、正常な精神状態に対比されるものである。

魔には三魔、四魔、八魔、十魔等の分類があるが、『大智度論』巻五に「魔有二四種一。一者煩悩魔。二者陰魔。三者死魔。四者他化自在天子魔。」（正蔵二五、九九中）と示される四魔のうち、第四他化自在天魔（＝天子魔）を本法、他を類従するものとして階魔という場合があり、自己の身心から生じる魔を内魔、外界から加わる魔を外魔とする分類と、外障によって内因が起こることが説かれ、この認識からは愛著によって起る心的顚倒を魔であると三愛の作用面を魔と論じ、外魔を魔の中心に位置させている構造がわかる。

第三「死魔」は死そのものを魔と理解することで、その考え方はおおよそ諸経に一致している。特に瑜伽師地論巻二九には、煩悩魔を「未来の生を感じる事によって死に至らせ」、五蘊魔を「死の働く対象」と論述され、死の原因となるものを魔と呼ぶ考えのある事がわかる。つまり、魔縁とは、魔自体のことであり、魔を呼込むもの全てを魔と理解する側面の瀰漫が諒せられるのである。

本邦の浄土論師にしばしば援用される中国の論書中、善導『往生礼讃』には「願弟子等、臨二命終時一、心不二顚倒一心不二錯乱一、心不二失念一、身心無二諸苦痛一、身心快楽、如レ入二禅定一、聖衆現前、乗二仏本願一上二品往三生阿弥陀仏国一」（浄全四、三六〇上）とあり、心身共に安穏な状態での臨終正念と来迎およびその充足を願っている。但し、正念と来迎の関係は分明ではない。また、元照『仏説観無量寿経義疏』巻上「四解二魔説一」では、善導の一切皆凡を説明し勧め、臨終見仏を魔とする事の誤り説き（浄全五、三六二下―三六三下）、宗暁『楽邦文類』巻四「浄土魔仏或対」においても同様に来迎と魔について論じている（浄全六、一〇四七下―一〇四九上）。臨終に仏が来迎する事の対局に魔の出現を前提に考え、その魔は第六天の魔王を考えている事を窺うことができる記述である。

三

『往生要集』巻中末「又行者等眷属六親若来看病勿レ令レ有下食二酒肉五辛一人上若有必不レ得レ向二病人辺一即失二正念一鬼神交乱病人狂死堕二三悪道一願行者等好自謹慎奉二持仏教一同作見仏

因縁已」（浄全一五、一一三上）や『臨終行儀』（恵心僧都全集一、三五〇）では、酒肉五辛を食した人が病人のそばにいることで正念を失い、鬼神、特に後者では悪鬼が来て三悪道に堕ちることが説かれ、法相宗の立場で臨終行儀を示す湛秀も『臨終行儀注記』で源信の考えを踏襲している。この鬼神、悪鬼は、人を惑乱させる人格的なものを有した第六天の魔に類するものであることは確かである。貞慶は『臨終之用意』では「又病人の心ととむへき資財なと。ちかつくへからず。魚鳥を食し酒に酔。葱韮なと食したらん人をは。いかにしたしき人なり共。門の内にも入へからす。天魔たよりを得て。心乱れて悪道におつるゆへなり。」（日蔵経六四、二六上）と往生要集に示される「鬼神」が天魔とされ、「狂死」が心乱れてという正念でない状態であることに置き換えられ、魔によって正念を失することが明確に示されている。

真言系の実範『病中修行記』において「可下殊念二不動尊一祈中臨終上事」では、「若纔憶二念是威怒王一。能令下一切作二障難一者皆悉断壊上。一切障者不二敢親近一常当遠離一。是修行者所在之所。無レ有二魔事及諸鬼神等一。纔念尚爾何況久憑。」（真言宗安心全書下、七八一）と、不動尊に祈ることによって、一切の障りとなるものが除かれその為に魔の存在がないことを説く。そこには、障りのあるものに触発されて→魔の発動という図式が根底にある。実範は、魔と鬼の類を別に記しているが同じ原因によって誘導されるので、同義と解釈したと思われる。

覚鑁『一期大要秘密集』では、父子を偽りの魔と定義し（興教大師全集下、二九九―一一二〇）、三愛によって邪道、妄獄、魔に堕ちるとされ、障りとなるものが具体的に方向づけられ、不動尊の慈救呪→魔の除去→臨終正念という図式が呈せらている。

『孝養集』、『不動講式』『不動講秘式』でも同様のことが述べられているが、『孝養集』では「知識問て言べし。何事か見えさせ給ふやと。又病者もありのままに答へよ。若し妄念の由を云ば。知識其に随つて教化せよ。又魔縁の由を云ば。其対治先に申しつるが如し。」（続浄一五、六七上）と、魔の接近には臨終の悪相が現れるということと、その除去法が明示されている。つまり、臨終の場によって悪い相が見受けられれば善知識の祈念によって正念を得させしむる仏菩薩を招来するいう暗喩であり、『一期大要秘密集』第九「没後追修用心門」、及び『孝養集』巻下（続浄一五、六二上―下）では連続した滅後儀礼が記され、臨終者の死後も同じように悪相によって魔の対処の意味付けが行われ修法が定められている。

日蓮系では来迎を強調することはないが、『千代見草』巻下の冒頭に、魔が正念を乱すことを母の実例によって説明し（日本思想体系五七、四四三―四四四）、「臨終の大なるさはり三

つ有。一には、断末魔のくるしみ、二には、魔のさはり、三には妻子のなげく声なり。」（同右、四四五）と臨終正念の障害を断末魔、三愛に類するものとは別に天魔と三に分類し説明している。但し酒肉五辛や女人は魔の誘引となる点は他の類書と同じである。これらは、魔を降伏する慈悲勇猛の僧等、看病人の努力により克服出来るものとされている。日寛『臨終用心抄』では、「魔の所以の用心如何」と設問し、仏菩薩の来迎奇瑞、魔の出現・悪相にとらわれることのないことを臨終のかなめとして勧めている。

四

周知のように法然は臨終来迎→正念の対場に立つもので、臨終来迎によって魔が除かれ、正念を得るという立場を打ち出している。つまり『往生浄土用心』では、「そのうゑ三種の愛心おこり候ひぬれは、魔縁たよりをえて正念うしなひ候也。この愛心をは善知識のちからはかりにてのそきかたく候。阿弥陀ほとけの御ちからにてのそかせ給ひ候へく候。」（昭法全五六三）と、魔が原因で正念を失うため、来迎によって除かれるものは三愛というより、三愛が誘引した魔縁であることが示されている。『法然聖人御説法事』では、「マツ臨終正念ノタメニ来迎シタマヘリ。オモハク病苦ミヲセメテ、マサシク死セムトスルトキニハ、カナラス境界自体当生ノ三種ノ愛心ヲオコスナリ。シカルニ阿弥陀如来、大光明ヲハナチテ行者ノマヘニ現シタマフトキ、未曽有ノ事ナルカユヘニ、帰敬ノ心ノホカニ他念ナクシテ、三種ノ愛心ヲホロホシテ、サラニオコルコトナシ。」（昭法全一六八）と、来迎の過程に三愛の除去が行なわれ、『一二箇条問答』には「念仏する者をは弥陀の光明をはなちてつねにてらして捨給はねは。悪縁にあはすして。必臨終に正念をえて往生する也」（浄全九、五七九下）とあり、『無量寿経』巻上「光明普照三無量仏土一一切世界六種震動　総摂三魔界一動三魔宮殿一衆魔惶怖莫レ不ニ帰伏一」（浄全一、一二）に説かれる、光明に照される効力が悪縁の妨害を果たす理解が示される。又、『七箇条起請文』には「われほどの念仏者よもあらじと思ふはひが事也。大憍慢にてあれは。それをたよりにて。魔縁の付て。往生をさまたくる也。」（浄全九、五一〇上）とあり、心的な動揺も魔縁となるものと体認している。

聖光、良忠とも基本的にはこれらの考えを踏襲しているが、聖光は『浄土宗要集』第一「雑縁乱動失正念故事」、第四「臨終行儀事」、第六「往生善知識事」、『臨終用心抄』巻末等では、愛執を離れることが臨終に重要で、臨終正念を念じて往生出来ると強調され、往生の方法とは平生から臨終に至る念仏であることを述べ、「魔王悪縁付魔業致。」（浄全一〇、二一二上）として、臨終行儀は「仏来給来迎善縁也」と

の理解をしている。悪業とは酒肉五辛、財宝、妻子の泣声、冥闇、悪臭等である。三愛の作用を聖光は「而逢三苦、一転倒苦、二錯乱苦、三失念苦也。此苦最後断末摩苦」と分類・説明してるが、魔については三愛によって「天魔たよりを得て。心乱れて悪道におつるゆへなり。」と、第六天魔が実体して考えられ、臨終の執着によって外的障害（＝魔）が呼込まれると把捉されていたことを示すものである。

良忠『法事讃私記』巻上では、死が仏道の障りとなるから死魔と分類すると再説し（浄全四、三七上）、来迎によって魔が消滅することから、「弥陀一教無シ魔事」と念仏者には魔が存在しないことを明言している。『浄土大意抄』等では酒肉五辛の禁制、三愛の発生を未然に防ぐことによって、魔を対治することが説かれ臨終行儀の励行に拍車を掛けている。

浄厳院本良忠『看病用心抄』巻末には「魔ノ来迎ト仏ノ来迎トヲ知ル事」として明遍が十種に対比分類をしてるものを掲載している。これらの記述は、悉く仏の来迎のすばらしさに反対する表現である。浄厳院本を隆堯が書写した時、実際に臨終来迎の有様を確認するために記したとされるが、臨終における仏の来迎に対局に対比される魔の来迎は重大事であった筈である。同時代光宗編『渓嵐拾葉集』巻一五では同内容を「魔来迎事」として『守護国界陀羅尼経』の引用を掲載し釈義している。

以後、浄土系では聖冏『伝通記糅鈔』四十（浄全三、八七八上―八八〇下）の所説を始め、慈空、義山、関通、察冏など近世に至るまで魔について様々な論説が試みられている。

五

これらは、臨終行儀・看取り場の意味に「仏の来迎の為の場」と「魔縁を取り除く場」という二元的考えがあり、さらに、臨終行儀と葬送との連関の根底には魔の対応が無視できない問題であることを示唆している。このことは、成仏、往生を問わず、仏道の目的達成の障害を魔と現わすなかで、死の周辺に顕される魔の理解は、心的障害と鬼神・魔者類を同一視した、日本化した仏教の一態を明視することができると いえる。

三愛もしくは酒肉五辛が魔の動因となるが、正念が乱れて魔が接近するのか魔が接近して正念が乱れるのか一定でなく、善知識・看病者が臨終行儀で魔への対処を行うことは、法然以降の仏の来迎によって魔が除滅する考え方の出現後も行儀の意義を変えて敷衍していくのである。

〈キーワード〉魔、魔縁、臨終行儀、臨終正念

（大正大学綜合仏教研究所研究員）